

特42

442

鄭
教生石
賜宮
錦本
唐和

北

東 京 圖 書 館

二
二
冊

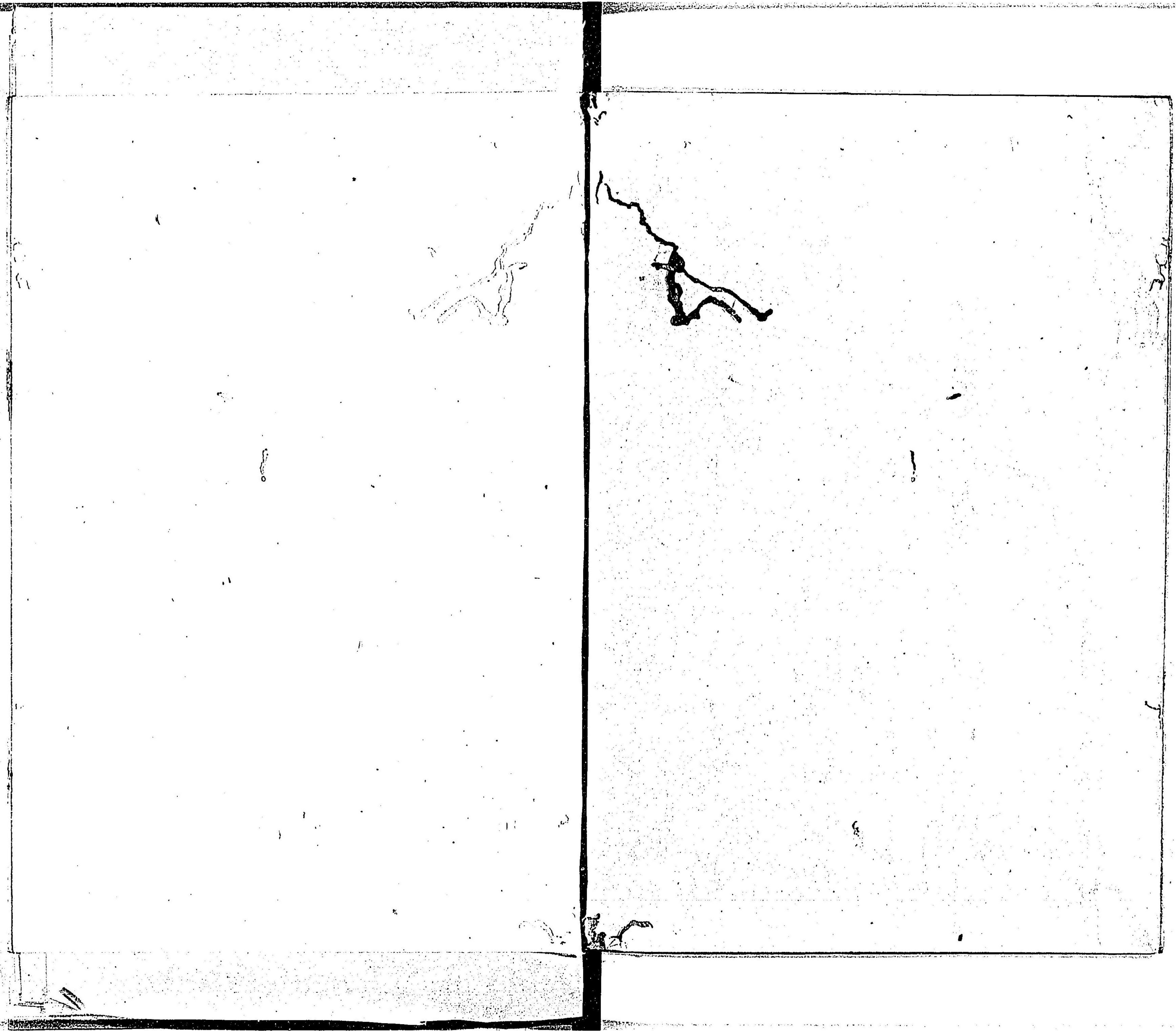
二
號

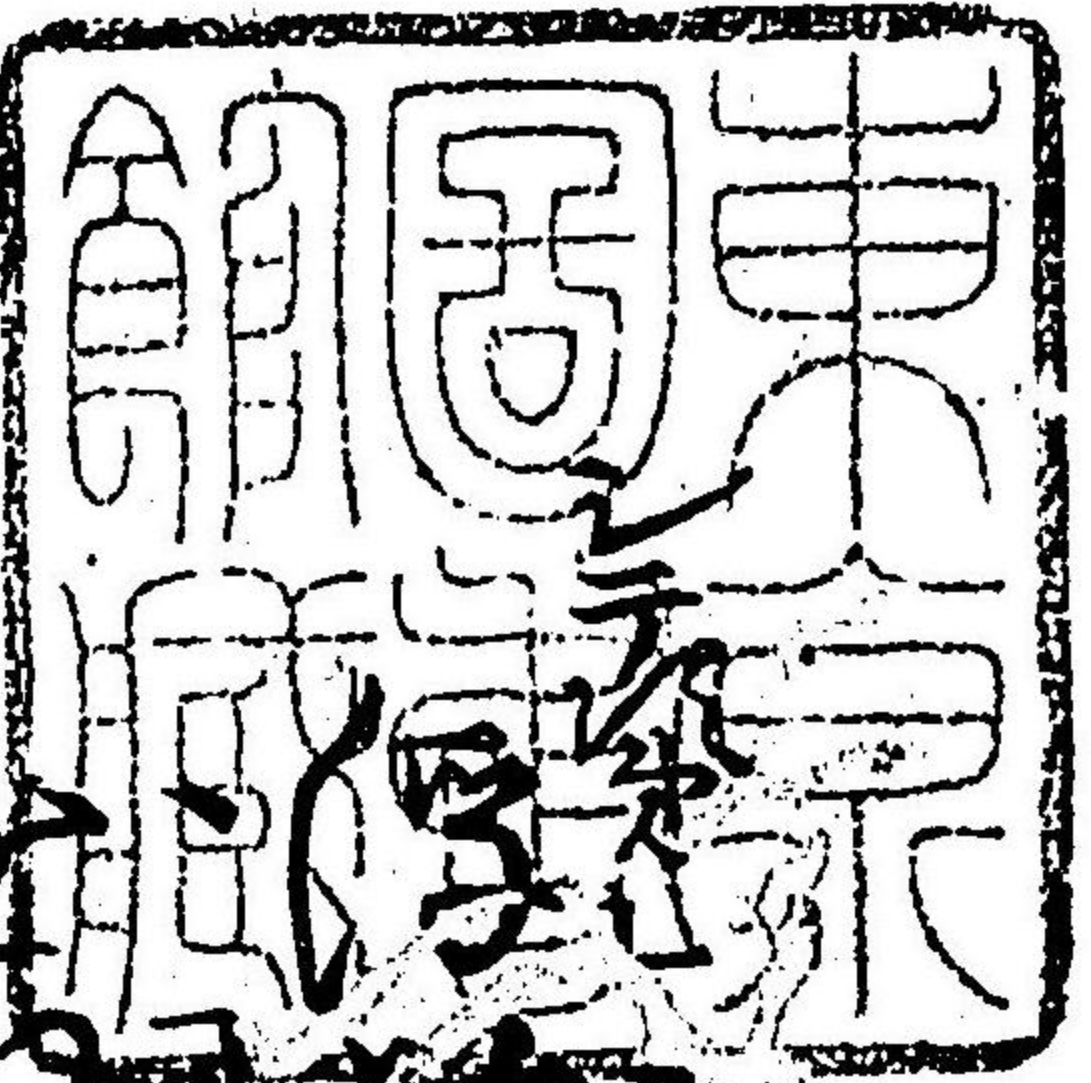
四
七
架

函

音
樂
類

和
書
門





耶 耶

夢路

是之蜀乃國也

我之親人也

子有あつる佛道をなするは

御事ありき事なするは

我國なりとて貴き事なす

邯鄲とあり一昔さかへりよ其入
 國のちりしきりあはれ其織
 のましまし由家なて作程あま
 乃一たのちもたしめりと思ひ
 きくしシテ梅其まゝシテくシテ
 小はシテ屋シテうシテあシテるシテ新シテ一シテ
 るシテはシテあシテるシテはシテ

成り國なり邯鄲乃松ありる果なる
 乃松ありるは上果なる
 告天乃ありるは一村
 ありあ富むる日まは鐘の中宿
 ありあ富むる日まは鐘の中宿
下松ありるは中宿
 乃松ありるは中宿
 乃松ありるは中宿
 乃松ありるは中宿

不孝門の前より朝日照るとも

大長

まの影をうり ちかよの夢をたぐひて

乃の位より珍びたるも五十年也

然此仙樂は三つもの年一子殿

まぐちもちおぼろしき程に天の

三つおぼろしき程に夏陰持てし

三つ

大長

たり とも天の持しめり 是仙

家の酒の香 ちかよの影をたぐひ

大長

三つ

ちかよの影あり 壽命のち

世の菊の酒 栄花の夢の萬

三つ

大長

ちかよ 君も豊よ ちかよの影をたぐひ

上

國去安ん王長久の影 其の影をたぐひて

しちかよの影ありてまはるちかよの菊

三つ

大長

のちかよの影ありてまはるちかよの菊

夢花をたらまらふ。相如を。松子。あ
 りて。多か。ふら。多か。ふら。地。女。所。更。
 夢。拜。と。圃。の。音。と。あり。
 地。宮。殿。樓。閣。を。地。那。那。乃。候。の。宿。
 夢。花。の。あり。五。十。年。地。あ。く。夢。は。
 同。の。夢。飯。の。一。炊。の。同。あり。地。あ。く。夢。は。
 地。あ。く。夢。は。地。あ。く。夢。は。地。あ。く。夢。は。

根。と。事。も。さ。ら。な。百。の。乃。款。樂。を。命。を
 り。れ。の。後。う。か。五。十。年。の。夢。花。社。
 夢。乃。為。さ。ら。是。ま。く。夢。の。夢。花。の。登。
 夢。より。ひ。乃。夢。う。も。五。十。年。の。ぐ。り。え。
 夢。く。も。信。信。な。ま。い。る。思。入。ま。く。あり。
 夢。行。る。も。一。ま。い。乃。夢。南。無。三。
 寶。く。あ。く。思。入。の。出。離。を。求。む。心。

御^ニま^ニ乃^ニ柄^ニあり^ニ。実^ニ有^ニ秘^ニ也。那^ニ那^ニの^ニ
 き^ニに^ニ首^ニ那^ニや^ニ那^ニ那^ニの^ニ。夢^ニ乃^ニ世^ニと^ニさ^ニ
 せ^ニの^ニえ^ニと^ニく^ニ。ヤ^ニ教^ニま^ニさ^ニあ^ニり^ニと^ニく^ニ。物^ニは^ニき^ニり^ニ

救す石

第^ニ三^ニ 心^ニは^ニ水^ニの^ニ浮^ニ世^ニは^ニ様^ニ
 山^ニよ^ニ。是^ニく^ニま^ニ玄^ニ翁^ニとい^ニは^ニ。道^ニ人^ニ也^ニ
 我^ニ知^ニ脚^ニの^ニ床^ニを^ニま^ニら^ニる^ニ。ひ^ニと^ニち^ニる^ニを^ニ
 歎^ニ言^ニ一^ニ見^ニ可^ニを^ニひ^ニと^ニま^ニい^ニ。終^ニ子^ニ拂^ニ子^ニを^ニ
 う^ニら^ニ振^ニく^ニ世^ニと^ニよ^ニ眼^ニを^ニら^ニく^ニも^ニ。此^ニ経^ニ
 多^ニ奥^ニ別^ニよ^ニひ^ニり^ニ。都^ニよ^ニよ^ニ巴^ニ冬^ニ夏^ニ

とも結ぶやと思ふウヤ雲珠乃
 牙煮つてた定有まじくシテ無
 様子未ひゆく乃奥を志く乃
 結ひシテめた下野やおよシテ慮
 急よきりくシテあシテ具名の邊
 魚もさよらさよひシテも此
 石の海へいよシテまシテ謂ふ如

シテ 支きの形を殺せ石をてへ入回やみ

及りの身が畜物シテはシテ命
 前かくシテ思うシテ殺せ石を志く乃
 さわてはシテ信持シテなシテ命
シテ かくシテ立のシテ給へシテ相此石の行故く
 殺せシテ乃シテ也シテ昔鳥羽院の
 上シテ乃シテ前シテ乃

枝よあまのつき菫蘭菊の花よかたれ
 此原の時志をたすこま秋のゆ
イサ、クリ地
 名り家 柳此たまもの前と
 出せ出せまきまきして行く乃
 とも白雲の上人ちりしりあり
カ
 御まの紅多きささきも 容教羨麗
 ゆらゆら門の敷蕙あはさか

三
 方時玉もれ前う智恵さうらり
 一事さこちりさ 経論の教
 和漢の文詩予管絃よまうさ
三
 又茶への暗か 下唐くまら
 きれもともおもい前まき 石れまき
クモ
 一りう時帝へ清涼殿よ清出あ 月
 御を安んじ堪ぬあ あつめ 管

弦の清音ハルナ響ヒキるハル秋乃アキノと急月ツキ
 ましマシ露ツキの青アヲのノ雲クモのノ動ウツクもモ
 はまハらラのノ吹フクのノ殿テンのノもモ
 し清ハルのノ音ネのノ上ウヘ入イるル幸サイのノもモ
 めメのノ音ネのノもモのノもモのノもモ
 身ミのノ音ネのノもモのノもモのノもモ
 きれキレのノ音ネのノもモのノもモのノもモ
マまマのノ音ネのノもモのノもモのノもモ

内ウチのノ音ネのノもモのノもモのノもモ
 竟マシのノ音ネのノもモのノもモのノもモ
マシありアリのノ音ネのノもモのノもモのノもモ
 給タマフひヒのノ音ネのノもモのノもモのノもモ
 快クワイのノ音ネのノもモのノもモのノもモ
 可カ為ニ有リのノ音ネのノもモのノもモのノもモ
マシいイのノ音ネのノもモのノもモのノもモ
マシ調テウ伏フツのノ音ネのノもモのノもモのノもモ

一しと羨ましく思ふ教にももつり
ヤア
 一くして世もいふまじの事よ
 一あひねく草の露と清く断る世
平
 一か様まじうく語おほはふらぬ成
 一人も流るる今さらせむし其古
ミテ
 一玉もの前にとあつて教を石を
 一魂まじくあつて世を人の世に
平

きくしと羨ましく思ふ教
 一針をさすくし同く本針と
其
 一二度思ふ事
信
 一笑ひての浅き人の夕煙の
上
 一夜よ明くさくはらさるる世あり
 一しと羨ましく思ふ教にももつり
此
 一かす夕闇の夜の色なれと此夜
 一あつて燈の我影ありと思ふし

石に給うて侍^下入ると石より^六出^六る
 多^下くも石より^下出^下る^下其^下の^下き^下り^下女^下石^下の
 ありと^下なり^下と^下た^下ち^下の^下女^下國^下の^下善^下の^下皆^下成^下
 仏と^下なり^下の^下今^下より^下の^下任^下持^下具^下足^下き^下り^下
 況^下や^下衣^下鉢^下と^下さ^下ら^下し^下く^下る^下あ^下ら^下ぬ^下成^下の^下疑^下白^下
 多^下く^下も^下ひ^下と^下た^下さ^下ま^下向^下燒^下香^下一^下石^下面^下
 高^下し^下く^下佛^下の^下ま^下の^下あ^下ら^下ぬ^下女^下氣^下氣^下教^下生^下

石より^下出^下る^下を^下し^下て^下し^下て^下可^下なり^下なり^下
 今^下も^下あ^下ら^下ぬ^下女^下の^下ま^下の^下あ^下ら^下ぬ^下女^下
 石^下の^下精^下の^下水^下の^下音^下あり^下の^下内^下の^下入^下塵^下子^下
 石^下の^下精^下の^下水^下の^下音^下あり^下の^下内^下の^下入^下塵^下子^下
 像^下と^下し^下て^下あ^下ら^下ぬ^下女^下の^下ま^下の^下あ^下ら^下ぬ^下女^下
 石^下の^下精^下の^下水^下の^下音^下あり^下の^下内^下の^下入^下塵^下子^下
 石^下の^下精^下の^下水^下の^下音^下あり^下の^下内^下の^下入^下塵^下子^下
 石^下の^下精^下の^下水^下の^下音^下あり^下の^下内^下の^下入^下塵^下子^下
 石^下の^下精^下の^下水^下の^下音^下あり^下の^下内^下の^下入^下塵^下子^下

六
物ニ行ハシるヤ也ハカハシテ也ハ此ニ石ニ行ハシるヤ也
見スルノ心ハ空ニ也ハ其ノ心ハ于テ以テ像
之有るカラニ行ハシるヤ也ハ其ノ心ハ于テ以テ像
今ニ行ハシるヤ也ハ其ノ心ハ于テ以テ像
物ニ行ハシるヤ也ハ其ノ心ハ于テ以テ像
五ノ后ニ讓ル也ハ現レ見ル我ノ心ハ于テ以テ像
羽院の心も其前ニに在りし也ハ其ノ心ハ于テ以テ像

我王法之也ハ其ノ心ハ于テ以テ像
也ハ其ノ心ハ于テ以テ像
とスルノ心ハ于テ以テ像
可レ也ハ其ノ心ハ于テ以テ像
増スルノ心ハ于テ以テ像
おもつカらシテスルノ心ハ于テ以テ像
頓レ也ハ其ノ心ハ于テ以テ像

打ちあつてあまの雲井を翔り海山を
 越く此所よりくねとせしトシテ夜初
 使つらうヤアくみうら介上総の介
 二人ト論言をかほきけくヤア奈良の
 仁身者ト返洛せよとの勅をうき
 野干きあふぬれぬトたきくト極古
 ぞくトとてト百目トとて射るトきる

是か道物の始トうやト両介ハ狩獲
 東あト知くト牧方ト誇ト奈良の射トをトあトめて
 草と見うトくト狩トまトるトまトるト行トと
 ちのつト系トはト顯トれト出トしトとト狩ト人の
 道トつトまトくト山トあトらトうトよトつトきトくト笑トぬトトトよ
 射トまトきトらトれトてト昂ト時トはト命トをトいトたトつトよ
 奈良のト原トはト露トもト消トてもトなトをト執ト心トハ

此野は、キ結つて、キ殺す石とあつて、キ人を
と殺す多年あれども、あひかき
歩法をうきて、キ此後悪事を
事ある人々の法僧は、キ約束の
事とあつて、キ約束の事とあつて、
鬼神乃ち、キあつて、キあつて、キあつて、
鬼神乃ち、キあつて、キあつて、キあつて、

野宮

軍 是ハ諸國一見ハ僧多シ我此程ハ
都々々々洛陽の名前曰野宮ナク
一見は、キ又秋を、キ秋を、キ秋を、キ秋を、
形々方度敷人向き、キ一見を、キ一見を、
思ふは、キ思ふは、キ思ふは、キ思ふは、
曰野宮也、キ曰野宮也、キ曰野宮也、キ曰野宮也、

身は志母を色へ清く入る思入の心
 何とあゆみの尊夜まきしをあらぬ
 候へ母よふくしき腰あはれく
 我此杜れ陰よかて古と思ひて
 志村篤くしおまめまふ世に一人
 してまう給ふに成人までま
 女
 成者よ同くおまめまふ社司
 女

志まむ是は古に秩官よたき給へ
 人のつら移ましの心もせ給ひたき
 存へ此子絶ぬまは長月七日の夕
 音を思ひ年よ人社志の言可
 よめは神のまあり庭よにまき
 なるうまの給ふまきさへ
 長くまよ
 思ひ苦
 思ひ苦
 思ひ苦

位ノ下ノ親と子ノ都路よあし
 物と親と子ノ都路よあし
 一ノ親と子ノ都路よあし
 守らるる人あはれもいと
 事おぼや^{女上}外業へも
 こそちつ^{女上}とよまき
 夢よ^{女上}ちつとよまき
 在^地なほ^地おぼや^{女上}外業へも
 夢よ^{女上}ちつとよまき
 在^地なほ^地おぼや^{女上}外業へも

きたる^{女上}おぼや^{女上}外業へも
 多^地け息^{女上}前^{女上}の秋^{女上}ありと
 秋^{女上}の月^{女上}森^{女上}の木^{女上}の
 こ^{女上}ろ^{女上}ろ^{女上}黒^{女上}木^{女上}の
 て^{女上}ま^{女上}ま^{女上}き^{女上}り^{女上}泣^{女上}き^{女上}隠^{女上}れ^{女上}失^{女上}よ^{女上}ま^{女上}き^{女上}
 色^{女上}や^{女上}杜^{女上}れ^{女上}木^{女上}陰^{女上}の^{女上}昔^{女上}長^{女上}く^{女上}同^{女上}色^{女上}成^{女上}
 茶^{女上}び^{女上}ろ^{女上}思^{女上}ひ^{女上}の^{女上}人^{女上}の^{女上}今^{女上}は^{女上}伊^{女上}呂^{女上}政^{女上}

一 女中 野の宮の杖の

移し若車。我も昔よの杖の杖の

甲中 堂 少 老 月 時 多 け 能 有 車 也

乃 以 へ 方 見 是 事 有 乃 志 也

簾 田 乃 様 也 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

よるへ
上女
もろく

さした事なく
下女
もろく

車乃ちうらも
下女
もろく

れちよも思入行も
下女
もろく

よらも
下女
もろく

あつち
下女
もろく

月も昔も思入
上女
もろく

柱乃ち露く
下女
もろく

むの
下女
もろく

かたる
上女
もろく

霧うら
下女
もろく

夢又
下女
もろく

野宮の音はくさくさして中流をたふ
 野宮の宮におひくさくさして
 本よりかきかへて
 乃ららむの身若よ出入の道
 を下り受たも思ひこも車
 下りかきかへて火事乃ららむ
 火宅乃ららむ

錦木

錦木乃ららむも思ひこも車
 事今 是は諸國一見乃僧も
 我らも東國をへる程み此度思
 立陸奥の果まで行きも
 横手も乃ららむ夕暮の雲も

建^早平^早く^早當^早河^早乃^早る^早也^早是^早の^早也^早

乃^早錦^早本^早細^早布^早乃^早の^早家^早乃^早る^早也^早

徳^早行^早故^早の^早名^早物^早乃^早の^早也^早

乃^早行^早也^早乃^早に^早行^早乃^早錦^早本^早細^早布^早乃^早其^早乃^早の^早也^早

乃^早行^早也^早乃^早に^早行^早乃^早錦^早本^早細^早布^早乃^早其^早乃^早の^早也^早

乃^早行^早也^早乃^早に^早行^早乃^早錦^早本^早細^早布^早乃^早其^早乃^早の^早也^早

乃^早行^早也^早乃^早に^早行^早乃^早錦^早本^早細^早布^早乃^早其^早乃^早の^早也^早

乃^早行^早也^早乃^早に^早行^早乃^早錦^早本^早細^早布^早乃^早其^早乃^早の^早也^早

乃^早行^早也^早乃^早に^早行^早乃^早錦^早本^早細^早布^早乃^早其^早乃^早の^早也^早

乃^早行^早也^早乃^早に^早行^早乃^早錦^早本^早細^早布^早乃^早其^早乃^早の^早也^早

乃^早行^早也^早乃^早に^早行^早乃^早錦^早本^早細^早布^早乃^早其^早乃^早の^早也^早

乃^早行^早也^早乃^早に^早行^早乃^早錦^早本^早細^早布^早乃^早其^早乃^早の^早也^早

乃^早行^早也^早乃^早に^早行^早乃^早錦^早本^早細^早布^早乃^早其^早乃^早の^早也^早

乃^早行^早也^早乃^早に^早行^早乃^早錦^早本^早細^早布^早乃^早其^早乃^早の^早也^早

乃^早行^早也^早乃^早に^早行^早乃^早錦^早本^早細^早布^早乃^早其^早乃^早の^早也^早

乃^早行^早也^早乃^早に^早行^早乃^早錦^早本^早細^早布^早乃^早其^早乃^早の^早也^早

てはあつらふ身をもかへさねへ胸あひ
 かへさぬ慈とも縋ぐ恨よもよ粉
 女 名ゆもたてく 逢ぬを種と 月を
 上 子 日 錦木はたぐあふ社朽よきれ
 子 乃 ぐくげあひ細布胸ありとやとて
 下 讀しほろあしのかぞもつらつてもあまのあまて
 下 言わ結あつらふやうな多のあつらひ
 下 下 下 下 下 下 下 下 下 下 下 下

乃松の言の葉とらひさきむら自れ陰を錦
 半 乃 言の言の葉とらひさきむら自れ陰を錦
 半 錦木細帯れ襦袢お誘へ 昔より此
 可のあつらひさく男女の媒よハ此錦木を
 作せむの家門よなる志るれ木あれ
 ふうふうくさくさうつらうてを錦木
 とらふ去程よ傳へて男の錦木をふた

入敷のまゝにまゐりて人の心感ひ百廿三
 年迄にまゝにまゐりて子東たよめり
 又此山陰に錦塚とていふ是社二年迄
 錦本まゝに人の古墳をまゐり
 直錦本の牧とては塚に築こめて是
 を錦墳とて作軍記し其錦塚を
 是れ故郷の物語なりとせしむ

錦のまゝにまゐりて人の心感ひ百廿三
 年迄にまゝにまゐりて子東たよめり
 又此山陰に錦塚とていふ是社二年迄
 錦本まゝに人の古墳をまゐり
 直錦本の牧とては塚に築こめて是
 を錦墳とて作軍記し其錦塚を
 是れ故郷の物語なりとせしむ

^上し上
 けり方勤の所吊りかあ二年にね
 けり契りたふもさし二年の目教
 積る此錦衣のあひさきは表値
 偶の有給さよしく染と見え
^上あは今うらさし色よあはさし
^上三年きさぬらさるゝ受又あ
 今宵三年の値偶よとさるゝ

^上あはと^上尾花う本すの思ふあは乃のさ
 ようらさくお塚のまほろよ顯
 出れさ歩傷なきよあはささ落
 の漢よ入ぬまの刺刺も首飾り替
 さるまきうくあはらうや
 屋あはさ古塚とさしつう内ら
 夕燈の陰あはさくあは家のさ

おさたぐ錦木さしき音を顯

きよきあきくはるは夏も現る

かきかきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかきかき

きし女秋乃虫の音ニテ しのぶ女あき上

きし女秋乃虫の音ニテ しのぶ女あき上

きし女秋乃虫の音ニテ しのぶ女あき上

きし女秋乃虫の音ニテ しのぶ女あき上

きし女秋乃虫の音ニテ しのぶ女あき上

きし女秋乃虫の音ニテ しのぶ女あき上

きし女秋乃虫の音ニテ しのぶ女あき上

きし女秋乃虫の音ニテ しのぶ女あき上

きし女秋乃虫の音ニテ しのぶ女あき上

きし女秋乃虫の音ニテ しのぶ女あき上

きし女秋乃虫の音ニテ しのぶ女あき上

きし女秋乃虫の音ニテ しのぶ女あき上

きし女秋乃虫の音ニテ しのぶ女あき上

きし女秋乃虫の音ニテ しのぶ女あき上

きし女秋乃虫の音ニテ しのぶ女あき上

えんと懺悔の途、夢中より程も顯と
コトナクセあり、カクちの錦女をさくハ女さ
 うちよ細命乃ぞ織虫の喜よさく
 同途しうあけきたたりハ内外よ
 あるうやむきられ初る中垣の草よ
 戸らき其まへもへもあきまへし月
 きれきせしとくさ歸りのまき程よ

思の教も積りまき錦女ハ色朽て
 さけう言よ埋木の人志まぬ牙あふ
 かくて思ひしとまら入る錦女ハ朽
 まももぐらきさくしへ海の中ハ海も
 父よ出まきうや慈の傳本も此錦
 女を讀ありカラハ思のまや榻のり
 かきうまらめく百おも同丸寐きん

とよらるる方よりおと責とくはさる
 せゆのまゝ二年あまのついでに
 陸奥のまゝ三年あまのついでに錦
 本ぞらるるまゝ三年あまのついでに
 身よらるるまゝ錦本とたに朽ぬつて
 油の後のまゝあまのついでに
 給のまゝ備へつて三年あまのついでに
 給のまゝ備へつて三年あまのついでに

上地とてなすや 錦本とてなすや
 成ぬし結さ 入るまゝあまのついでに
 うらまゝあまのついでに
 乃さるるまゝあまのついでに
 加あまのついでに
 さるるまゝあまのついでに
 織る細布乃重 中へさるるまゝあまのついでに

長崎の唐人船の多しを明の敷しつゝ
 やくある處を成りてその名を記す
 夢人ありあざねなる錦衣を細布
 毛夢も彼は松尾のくた
 船の原野中ノ塚とて成り
 まる

早江

唐船

船様名者ハ九州箱崎のまへ
 ちく山佐とてくを唐土と日本
 船のありきりあつて日本
 ちくしつし留守の唐土の船と日本
 ちくしつし留守の唐土の船と日本
 ちくしつし留守の唐土の船と日本

七とくも直ぐのくも也十三回よ成
 山果多半馬を歩ませ持て山程よ
 飯祖慶官人より付野のくもをば
 乃今日も申すまじくもと存候
 東云
 色ろろの毎の如く松茂路程あり
 殊う那 是ハ唐去明判の津イ
 ぞくすくもく兄弟乃者あり

天
 扱も我父官人等ととを目今すの賊
 船もろろの毎の如く松茂路程あり
 三日よも也の如く松茂路程あり
 一はよも此の如く松茂路程あり
 三戸はとと 思ふろろ目と昔日と
 一はの如く松茂路程あり
 一はの如く松茂路程あり
 一はの如く松茂路程あり

一 ちも目めすすも毎のみそ
 一 果よある書と松浦の浪
 一 路の如く行く程よくまよのまきし
 一 つるちちお尋よまぐちまきり
 一 唐去人のつたるの
 一 祖慶安人未存甘まて箱崎殿よ
 一 石つるまきりす一 所行よ校の寶

一 ようつ書て返國はまきためよ
 一 今此可し備うてら
 一 人き未存目まぐちまきり物指とて
 一 御出の指了れは法徳の法徳とて
 一 此の合せし
 一 ちちの書よ待
 一 ちちの書よ待
 一 ちちの書よ待
 一 ちちの書よ待

づかへ家路も急し子登のわらわ
らむおきれ一葉月一秋のころあふ
の倉一葉なまらぬだとももぬぬやう
日さぬ半ひく星のちるま一葉ま
秋長谷川咲きの野鉤三葉る者乃るるの
なぐらあき一葉是の唐古明別れ
津長谷川よ船も舟入一葉者あり秋長谷川のり

はるよ自今よ海も馬もあつらひ草
のし田のい唐古もらふよのいあて
こしよの言故郷もくさく一葉て

年長自今よ海も馬もあつらひ草
又もらふよのいあてのいあて
事長も思ふよのいあてのいあて
是もらふよのいあてのいあて

づがうは子たありきへ考女の枝の
 花わてふら果のらありし上書地
 てもよおらうの半の舞のよく子
 けよおちるもはるも入倫よ
 りておちれらあつても果ありく
上書地 家路は練くきく上書地
 文とあししめを梅とるよ唐書

中よ馬とて何やらは物ありん
 中よあれもあつての花はよ馬と
 てもおしヤア椎林よ子ニ入せらあつ果は
 の名前也梅あつしし目よ奉へ
 了き増への國をへあつ語入わ
上書地 果あつとよ唐書精の奉とたよ
 ましたつとさきうひくや九年の

一毛^ニ又^ニた^ニあ^ニた^ニの^ニ母^ニ國^ニあ^ニる^ニ毛^ニ
 痛^クう^レや^レさ^レそ^レ愛^シ慈^シく^レ行^ハほ^クら^レぬ^レ
 子^ノめ^ノ多^クく^レあ^レら^レば^レも^レま^レま^レま^レま^レま^レま^レ
 及^ハか^ラい^ハ海^ノ軍^ノ事^も思^フら^ズと^ス
 上^地に^ハあ^らむ^はい^はか^く程^もあ^らず^の音^に
 の^しと^くい^はま^し松^葉や^来よ^の所^のに^ん
 相^違ひ^もな^くあ^らむ^はい^はか^く程^もあ^らず^の音^に
 相^違ひ^もな^くあ^らむ^はい^はか^く程^もあ^らず^の音^に

相^違ひ^もな^くあ^らむ^はい^はか^く程^もあ^らず^の音^に
 相^違ひ^もな^くあ^らむ^はい^はか^く程^もあ^らず^の音^に
 相^違ひ^もな^くあ^らむ^はい^はか^く程^もあ^らず^の音^に

相^違ひ^もな^くあ^らむ^はい^はか^く程^もあ^らず^の音^に
 相^違ひ^もな^くあ^らむ^はい^はか^く程^もあ^らず^の音^に
 相^違ひ^もな^くあ^らむ^はい^はか^く程^もあ^らず^の音^に

信^{ニテ} 此の如くも思ふ事

そは^{ニテ} 思ふ事

か^{ニテ} 思ふ事

ま^{ニテ} 思ふ事

あ^{ニテ} 思ふ事

い^{ニテ} 思ふ事

是^{ニテ} 思ふ事

梅具舟^{ニテ} 思ふ事

舟^{ニテ} 思ふ事

舟^{ニテ} 思ふ事

舟^{ニテ} 思ふ事

見^{ニテ} 思ふ事

也^{ニテ} 思ふ事

二^{ニテ} 思ふ事

その方ありては...
可い事停... 自やせん... 雲宵一刻...
下... 價... 諸...
國とありては... 有るる...
と日本人... 箱...
崎の... 女...

中... 舟... 舟...
目... 舟...
出... 舟...
舟... 舟...
舟... 舟...

力ある事此れ其の者た此可

あへん其ははるく者もくは程よ

付信も果るはるくもあへん有る

此方(兼)人 目抄子 其情あははるく

至まあへんはるくもあへん

程とあへんは唐紅又あへん

すもあへんはるくもあへん

其 あ子止 何 あ子止 何 あ子止 何 あ子止

其 あ子止 何 あ子止 何 あ子止 何 あ子止

其 あ子止 何 あ子止 何 あ子止 何 あ子止

其 あ子止 何 あ子止 何 あ子止 何 あ子止

其 あ子止 何 あ子止 何 あ子止 何 あ子止

其 あ子止 何 あ子止 何 あ子止 何 あ子止

其 あ子止 何 あ子止 何 あ子止 何 あ子止

聖のまゝに... 鶴...
 うも皆子... 思入...
 神... 命...
 行... 上...
 美... 命...
 よ...

物... 能...
 物... 障...
 國...

唐舟

船に事しつる舟は

辨と思はる甲いふも舟の

うごも當社に情もはる見あゆ偽

けらあゆめく毎に業

給シテ見は知る中甲有種

のさや知る猪天納受しつ子

と科るあへ給カる種カも

餘りカしつる特別カとつる

いふ唐人の船に夜業カとつる

位カの舟も業カとつる子

とも掉のさる手も舞の神カ打つ

浪の敷カつるつる西の也

上陸の舞樂カとつる名

とつる海つるさる

とつる海つるさる

於此處所記之舞乃猶之也
 也此手也やあん帆を引つ
 下舟子たほさひさりきつ舟子
 之候ひいけそきろりけりて
 意まらむ

右之本者觀世太夫織部
 章句真本令放行畢

正徳六丙申歲弥生

天保十一庚子歲孟春改正再板

皇都二条通御幸町西江入町

山本長兵衛

